

第 41 回 北海道古民家再生協会会員の会例会 議事録

記録日：2014年 1月21日

記録者：江崎 幹夫

|        |   |
|--------|---|
| 団体名    | 一般社団法人北海道古民家再生協会会員の会 例会   |
| 開催日時   | 2014年1月 18日(土) 17:30~19:00  |
| 開催場所   | 宮の沢若者活動センター 活動室A  |
| 出席者    | 会員：江崎、齋藤、瀬口、原田 オブザーバー：飯田、早川、早川、皆川、河野、菊地(※敬称略)   |
| 議事     | <p>1) 挨拶<br/>北海道古民家再生協会 理事長 江崎 幹夫<br/>新年の挨拶と平成26年も例会の運営にご協力よろしくお願ひ致しますとの旨の挨拶。</p> <p>2) 第1回再築大賞 投票中<br/>全国の工務店の再築作品に1月31日まで一般投票を受け付けていますので投票をお願いしますとの旨の報告。</p> <p>3) ジャパトラライター募集に関して<br/>「日本の伝統」(毎月発刊)に各地の情報を頂けるよう「ジャパトラライターの募集」を始めます。ぜひご応募ください。</p> <p>4) 第3回古民家フォト甲子園に関して<br/>第3回古民家フォト甲子園が2月よりスタートします。北海道では北海道教育委員会並びに札幌市教育委員会の後援を請けますので、高校生(中学生)に告知をお願いいたします旨の報告。</p> <p>5) 全国会員大会に関して<br/>2月26日に第4回グリーン建築推進協議会(古民家再生協会全国連絡会議)全国会員大会が開催され、同日午前中に古民家鑑定士の横軸となる団体による説明会が開催される旨の報告。</p> <p>6) 特別講演 卒業論文発表<br/>北星学園大学 皆川 智子<br/>要旨「本研究では、循環型社会を実現すべく活動されている方々に聞き取り調査を行い、モノも情報も溢れかえる社会で本質を見極めるため、また、次世代に自然と共生できる建設的な未来を遺すためにはどういったことが必要であるかについて古民家という再生可能な住宅建築に着眼し検討することを目的とする。」(内容は別紙参照)<br/>古材等伝統資財についてよくまとまった素晴らしい発表でした。</p> <p>7) 北海道伝統資財再生機構からのお知らせ<br/>厚田町の明治時代の古材買取の話がある。今年も伝統資財を残す活動を進めていく旨の挨拶があった。</p> <p>8) 「第7回 古民家鑑定学習会」 8) 今後のお知らせ<br/>2月8日(土) 10:00 第5回住育学校(宮の沢若者活動センター 活動室A)<br/>2月8日(土) 13:00 古民家鑑定士講習・試験(宮の沢若者活動センター 活動室A)<br/>2月8日(土) 18:30 第42回例会(宮の沢若者活動センター 活動室A)<br/>2月9日(日) 13:00 第4回 木の住まい教室(木心庵 豊平区豊平5条6丁目1-10)</p> <p>9) 閉会</p> |
| 決定事項   | 次回例会2月8日(土) 18:30~ 宮の沢若者活動センター 活動室Aにて行う。  |
| 次月議事内容 | 次回議事録記録者 江崎 幹夫 ・各自報告事項 など   |

# 古民家から学ぶ循環型社会

1008041

皆川 智子

古民家は、築 50 年が経過している木造の住宅と定義付けられている。木材や土等の自然素材を建材としているため、使用後は自然に還る循環型建築である。太陽光発電設備や断熱性に優れた壁、窓等を持つ“エコ住宅”も人気を集めている昨今だが、コストダウンのために用いる輸入材は大量の輸送燃料を消費し、使用建材の大半を石油原料の合成資材が占める。合成資材は外観が美しく低価格だが、添加物や有毒物質が含まれているためシックハウス症候群などの健康被害といった問題もある。建築基準法では新築に 24 時間換気システムの設置が義務付けられているほどである。過度に利益を重視し、コストダウンと効率化を最大限に追求した消費社会にはこうした落とし穴も存在している。

このような事態を招く背景に、経済重視の産業構造の確立がある。戦後の高度成長期の影響を受けた大量生産・大量消費の産業構造の定着は根深く、我が国の住宅産業は建てては壊すスクラップ・アンド・ビルドが主流となっている。解体時には処理に大変な人手とコストを必要とし、環境への負荷も甚大であるが故に、人口の減少が予想される今後の社会の懸念材料となっている。

日本人の価値観にまつわる注目すべきエピソードがある。木材は時を経て乾燥し、強度を増す過程で切れ目が入るのが自然現象である。人工的に乾燥させる現代の住宅用木材に比べ、自然乾燥の木材は頑丈で上質と言ってよい。しかし、日本の施工主はヒビのある自然素材を受け入れないようである。表面が滑らかな石油製品に囲まれ、木材本来の姿を見慣れていないからである。また、住宅を建てる際、替えの利かない建物自体の構造よりもシステムキッチンやユニットバス等、入居後にいくらかでも取替え可能な住宅設備にコストをかけることが多い。表面上の美しさや耳当たりの良い宣伝に誘引されてばかりでは、住まいや家族の安心・安全を守れない。

本研究では、建築業界を通じて循環型社会を実現すべく活動されている方々に聞き取り調査を行い、モノも情報も溢れかえる社会で本質を見極めるためにはどのような心がけが必要であるか、また、次世代に自然と共生できる建設的な未来を遺すためにはどういったことが必要であるかについて古民家という再生可能な住宅建築に着眼し検討することを目的としている。調査対象は石川圭子さん、齋藤康志さん、林文浩さんの 3 名である。

石川圭子さんは住まい教育推進協会認定 住育コンシ

ェルジュ兼、古民家鑑定士である。“住育”を通して環境を考え、住まいの正しい知識の普及を目指すべく活動されている。ご自身も一児の母親である。職務に従事する間、バブル後に起きたマンションの供給過多と、その先に迫る解体ラッシュの対策が一向に取られていないことに危機感を覚え、自ら声を上げたのが現在の活動のきっかけである。

齋藤康志さんは北海道伝統資材再生機構の代表理事で、伝統資材施工士、一級古民家鑑定士の資格もお持ちである。古材に残ったチョウナの跡一つでどんな性格の大工が施工したかが浮かび上がってくる等、背景に物語が見えるのが古材の最大の魅力であると語り、実際に文化や伝統が住宅の中で息づく古材を次世代に継承すべく活動されており、自社で古材の取り扱いも行っている。

林文浩さんは北海道瓦屋根保存普及協会の代表理事兼、厚生労働省公認の一級瓦葺技能士である。30 歳を目前に瓦職人への道に進み、「北海道に瓦屋根はそぐわない」という間違った概念を払拭すべく北海道仕様の瓦屋根の施工方法を独自に編み出された。札幌市内にある自社では全道各地で施工を行っている。北海道の屋根の選択肢に瓦を一般化すべく、保存活動はもとより普及活動に尽力されている方である。

以上 3 名の方にお話を伺った後に行き着いた結論は、モノと情報が混沌とした現代においては、人それぞれが正しい情報を得た上で、ライフスタイルに合わせた事物を取捨選択するしかないということだった。たとえ有害なものであっても、一度世に出てきたものを無かったことにすることは出来ない。また、住宅の消費行動という観点からは、スーパーマーケットで食品を買う際に産地や添加物の記載を確認することと似たようなことが求められているように感じる。「衣・食・住」の“食”での安全に対する常識を“住”にも拡大すべきだと思う。

文明に染まり過ぎない暮らしは、精神的な豊かさをもたらすだけでなく自己の利益や安全に繋がり、また次世代へのよりよい環境の継承にも繋がる。どんな生活をし、どうやって家族や次世代の安心や安全を守っていくのかを考える必要性は十二分にある。自身も正しい知識を持ち、創意工夫をしながら自然と共生した循環型の暮らしのスタイルを作り上げていきたい。

(指導教員 濱 保久 教授)